



私は乳がんオタクハルサー！！

宮良クリニック
宮良 球一郎

ランプ生活だったから多分私が4～5歳の時だろう。小浜島の南東の端に赤瓦屋根の実家がある（小浜島：NHKちゅらさんで名が知られるようになった竹富町内の小島）。その平屋の三番座と台所（と言っても土場だが）に繋がる板間のランプの下で眠気まなこをこすりながらじいーっと、慌ただしく動き回る祖母の姿を追っていた。

当時は水道がないので、雨水をためた甕（かめ）や井戸から水を汲んできて祖母は朝食の準備と昼の弁当作り。もちろん材料は自家製。家周囲の石垣や近くの畑で採れた野菜類。やがて東の空が少し明るくなって周りが見渡せるようになる。納屋や床下から鶏を追い立てて産みたての卵を取ってくる。これが私の毎朝の日課。しばらくすると祖父も起きだし、着替えもそこそこにチューカーからお茶を一気に飲み干して牛をつなぎなおしに出かける。祖父が戻るのが待ってやっとならべて朝飯。そして馬車に乗ってゆったりと畑仕事へ。

50歳を超えた今でもあの情景がいつも鮮やかに思い出される。きっと私の原風景なのだろう。

外科医として10年を超えた頃、癌研究所で乳癌の魅力に取りつかれ帰郷。癌研時代の恩師の1人である坂元吾偉先生がいつも言っていた。「我々は本当にいつでもどこでも乳癌の話しかしない」。最初は半信半疑だったが本当にハマってしまった。いつも乳癌のイメージカラーである「ピンク」を身につけ、大げさだけど乳癌の事を考えるのが好きで好きでたまらない「乳がんオタク」になってしまった。その後、色々な先生のお世話になり、様々な経験を得た後、縁があり乳癌を専門とした城を持つこともできた。きっとこのまま乳癌に残りの人生の全

てを捧げるだろうと家族も周りもそして私自身も疑わなかった。

ところが今、早朝虫よけスプレーを全身に振りかけ、雨靴を履き作業道具一式を腰に巻きつけ庭や畑にでている。庭木の手入れ、プランターや地植えした野菜への水や肥料やり、そして雑草取りと汗だくになりながら出勤時間ぎりぎりまで精を出している。乳癌をおろそかにすることは全く無いが、遅く帰宅しても、ほろ酔い加減でも懐中電灯と割り箸を持って害虫退治を一日の最後の仕事としている自分がある。

???。一番驚いているのが妻だ。これまで14年間のアパートメントの生活で玄関周囲に義母が育てていた鉢植えの木々に全く興味を示さず、水やりもせず、自宅の草木と接するのは台風避難でエレベーターホールに移す時だけという情けなさだったから。

何故? きっかけは妻念願の家を建てたことだろう。

当然家は設計から内装まで全て妻担当。私は一切口出しも出来ず! ?に、与えられた担当は自然の流れで庭の管理に。庭とは名ばかりの荒地をみてさすがに今度は何もしないわけにはいかなかった。雑草だらけの庭にしたら家族皆から総すかんを食うことになるだろうからだ。私は乳がんオタクだ。それならば1年中必ずピンクの花があちこちで咲き、常に「乳がん」を意識できるような庭にしようと思いついた。

暇を見つけてはホームセンター通いをし、とにかくピンクの花を咲かせる花木を集め庭に、鉢に配した。おかげで今はピンクの薔薇とピンクの紫陽花が競うように咲いている。しかしこれで話が終わらなかった。ホームセンターに足繁く通ううちに島バナナ、島パンシルー、シークワサーがやたらと目についた。小浜島の実家庭は、四季を通じて様々な果実があったなあ。美味しかったなあ。私は原風景を思い出した。祖父母は農民だった。高校まで休みになると島に渡りキビ刈りの手伝いをしていた私にもすっかり農民の血が入っているのだ。自分の手で作物を育てる快感が甦ってしまった。

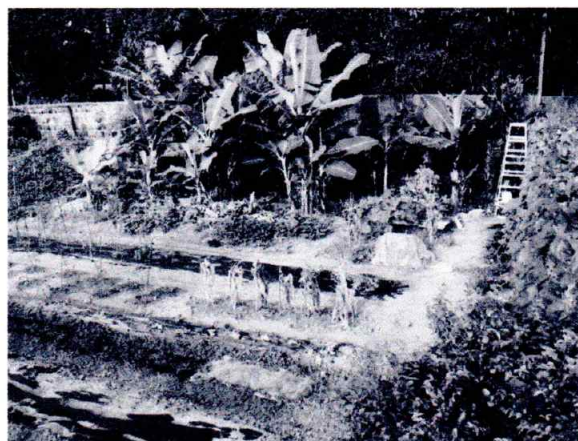
気付いたら実家に対抗心? を燃やし、裏庭に所狭しと沖縄県産果実を植えまくった。プランターにはトマト、ゴーヤー、キュウリなどビギナ一定番の野菜が。

土をいじりながら祖父母の私に対する愛情も再認識できた。太陽と雨のもたらす恵みに感謝し、四季の移り変わりに感動しながら、乳癌診療に精をだす自分を見出してしまった。

私の農民の血はとどまることを知らない。ついには畑を手に入れ、耕運機も購入し家庭菜園の枠を飛び越えてしまった。自然も愛する乳がんオタクハルサーとして新たな人生を歩みだした。



数種類の熱帯果実が林立する裏庭



自宅隣の実験畑